



たった一人のためにでも、世界をつなげたい。

CWS JAPAN

Church World Service

NEWSLETTER No. 52



今後の事務局体制について

新型コロナウイルス感染症により影響を受けられた皆さまに、謹んでお見舞い申し上げます。

CWS Japanは、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、これまで職員と事業対象地の人々の安全を最優先し、活動を進めてまいりました。今後の事務局体制につきましては、昨今の日本国内での感染拡大の加速化に鑑み、下記の方針のもと活動を行います。

【今後の事務局体制】

- ・原則、在宅勤務制度を活用したリモートワークを行う。
- ・各種会議への出席は、極力対面会議を避け、テレビ会議等で対応する。
- ・出勤する必要がある場合は、時差通勤により混雑ピークを回避する。
- ・そのほか予定されているイベントや研修等への参加については、当面の間、見合わせるか、もしくはオンライン参加のみに限る。

出勤する場合、下記の対応策を実施しています。

- ・オフィスには同時に最大3名まで勤務できることとする。
- ・オフィスでは対面を避けるよう、机と椅子を配置する。
- ・定期的に窓を開け換気する。
- ・手洗い、うがい、マスク着用を徹底する。
- ・アルコール消毒液を設置し、事務所を出入りする際に利用する。
- ・現在進行中の国内外事業に伴う出張（事務局所在地である東京都および自宅所在地県外）は、当面の間、見合わせる。

なお、引き続き、今後の当事務局へのお問い合わせはお電話にて承りますが、状況次第で繋がりにくい場合がございます。お急ぎの場合は、右記メールアドレス宛にもお問い合わせ頂きますようお願い申し上げます。ご不便をおかけして誠に恐縮ではございますが、ご理解・ご協力いただけますと幸いです。

(次項につづく)

2021年1月発行

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、ご理解をいただき、ありがとうございます。

Facebook
twitter
instagramでも
情報発信しています！

最後のページを
ご確認ください□

特定非営利活動法人CWS Japan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

✉ public@cwsjapan.jp
☎ 03-6457-6840

2021年も昨年と同じように、もしくはそれ以上に、様々な局面で変化を柔軟に受け入れ、対応していくことが求められる一年になると感じております。

このコロナ禍でも、誰一人取り残されることなく、すべての人が大切な人や、大事なものが大事にできる社会を実現できるよう、CWS Japanは引き続き、活動を継続してまいります。

CWS Japan事務局職員一同、ご協力いただいている方々、活動に関わってくくださる方々への感謝を忘れず、鋭意努力してまいりますので、どうぞ本年も温かいご理解とご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

(CWS Japan事務局一同)

パキスタン/害虫被害緊急支援 フェーズ2が開始しました

2020年1月以来、東アフリカから中東、南アジア地域において、サバクトビバッタ（以下、バッタ）の被害が深刻化しています。パキスタンもバッタの被害を受けている一つであり、CWS Japanはパキスタンの中でも最も被害が深刻な地域の一つであるシンド州ウマルコート郡において、2020年4月より支援活動を開始しました。一方で、同地域は2020年8月に豪雨と洪水災害が発生してしまいました。バッタの被害に加えて、これら水害により農作物に甚大な被害が及び人々の脆弱性が増しただけでなく、長期化した雨期によりバッタの繁殖に好都合な環境がつくられ、将来的なバッタ被害の再発生のリスクも高まりました。

このような状況を受け、支援の第2フェーズを2021年1月より開始しました。支援の第2フェーズでは、再発が懸念される害虫被害を含む将来の災害に備えるため、(1)対象地域の農家が具体的にバッタの被害を軽減する施策を実施し学ぶこと、(2)農業従事者を対象にバッタに対する予防・対策が備わった安定的な農業の知識がコミュニティに定着することを目指しています。

具体的なバッタの被害を軽減する施策として、



畑の周りに側溝を作ります。側溝により畑の水捌けを良くすることで、地中の余分な水分量を適正に保つことができ、バッタの繁殖と成長を抑えることが期待できます。また、近隣エリアから対象地域に飛来したバッタの卵が孵化後、成虫（飛ぶことが可能）になる前のバッタを側溝で捕獲することで、バッタが成虫後に飛来／移動し、対象地域の広範囲の農作物に被害を及ぼすことを未然に防ぐことも期待できます。側溝より幼虫期のバッタを駆除するという伝統的な方法は、国連食糧農業機関（FAO）や現地の研究機関等でもバッタ発生初期段階までは一定の効果があることが認められており、環境に対する負担も少ないとされています。

また、第1フェーズに引き続き、災害に強くなり安定的な農業に必要な知識に関する研修を受ける機会を、より多くの農業従事者に提供します。こうした知識が地域に広く普及することにより、地域の連携が強化されることが期待されます。

発生した災害被害への支援だけでなく、予見しうる災害に備える防災・減災に対する支援の重要性がSDGs（持続可能な開発目標）等でも強調されています。第2フェーズの支援は、直接的な被害への支援だけでなく、地域のチカラを高めて、自らの手で災害に対してより強靱な地域を作るための支援です。CWS Japanは地域の主体性を重視し、これを後押しできよう支援を実施しています。

なお本支援事業は、ジャパン・プラットフォームの助成金をはじめ皆様の温かい支援に支えられています。引き続きのご声援とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

(文：プログラム・マネージャー：
五十嵐 豪)

インドネシア/中部スラウェシ州 地震の被災者に対する戸別トイレ の設置及び衛生促進事業が終 了しました

CWS JapanではCWS Indonesiaと協力し、2018年9月に発生した中部スラウェシ州地震による被害を受けた人々の支援を行ってきました。前期事業では仮設住宅建設支援を行い、今回の事業では、感染症発生リスクの軽減に貢献し、対象地域住民の健康状態の向上に寄与することを狙いとし、当仮設住宅を対象に、設計基準を満たした戸別トイレを供給し、衛生教育支援を実施しました。その結果、下記のような結果を出すことができました。

まず一点目は、地震の被害が集中しているインドネシア中部スラウェシ州シギ県及びドンガラ県において、当災害の被害を受けた対象世帯273世帯（1,089人）にトイレを提供したことで、トイレの利便性、裨益者の安全及び尊厳を保ち、裨益者による持続的なトイレの維持管理ができるようになりました。97%の裨益者が当該トイレの利用の快適さ及び安全性に関してポジティブな回答をしました。本トイレ建設は、条件付き現金給付を採用しました。基準に沿ったトイレ建設資材の購入に使うことを条件に現金を給付することです。この手法により、裨益者各自で資材を調達したことで、許容範囲内で裨益者の好みに合わせて資材の選択が可能となり、成果物に対する愛着やオーナーシップが醸成されました。

二点目は、トイレの設置と衛生教育の実施により、被災後は屋外排泄を行っていた全世帯が屋外排泄を止めたと回答しました。他にも共有トイレや近所のトイレを借りるなどして生活していた世帯も、戸別トイレの利用に切り替えることができました。安全が確保され、排泄物や汚水の処理を適切に行うことができるトイレの設置は、地域の衛生環境を適切に維持することに貢献します。

最後の事業の成果としては、本事業を通じた衛生促進活動がきっかけで、対象地域の住民による自発的且つ継続的な衛生教育の実施が続けられ、コミュニティ内に知識の継続的な伝播が行われる習慣ができたことです。

また、当初計画にはなかった新型コロナ感染症にかかる啓発内容も追加され、全対象者に対して関連衛生教育が行われました。当初の本事業の成果のスコープにはありませんでしたが、このように新型コロナ感染症の症状や予防対策について正しい知識を裨益者が習得できたことは、未だ感染拡大の終息の兆しが見えない状況において、重要な成果であったと考えられます。

今後は、本対象地域及び周辺地域の新型コロナ感染症による脆弱なコミュニティへの影響を注視する必要があると考えています。2018年のインドネシア・中央スラウェシ州地震・津波災害で被災した対象地域の人々は未だ復興過程において、安定的な収入源を失われ日雇いで暮らしている状態のなか、新型コロナ感染症の拡大及びそれに伴うロックダウン等がもたらした社会経済的影響も合わさり、当対象地域の人々の生計に甚大な被害をもたらしています。本事業の対象地域の人々は2018年の災害が原因で発生した地盤の液状化や水脈の変化によって、これまで行ってきた農業や漁業からの安定的な収入源を失い、日雇い建設労働やそのほかの小規模ビジネスによってその日の生計を立てており、貯金や資産を保有していない世帯が多いことがわかっています。今後、同地及びほかの地域での被害の更なる深刻化が予測されるため、引き続き、CWS JapanはCWS Indonesiaと連携し、状況を注視していきます。

(文：プログラム・オフィサー：西澤紫乃)



(事業後の評価活動の様子)

令和2年7月豪雨の教訓をまとめたレポートを発行しました

阪神淡路大震災から26年目を迎えるにあたり、過去の教訓から積極的に学び、より安全な明日へと繋げていく気持ちを新たに持ちたいと思います。

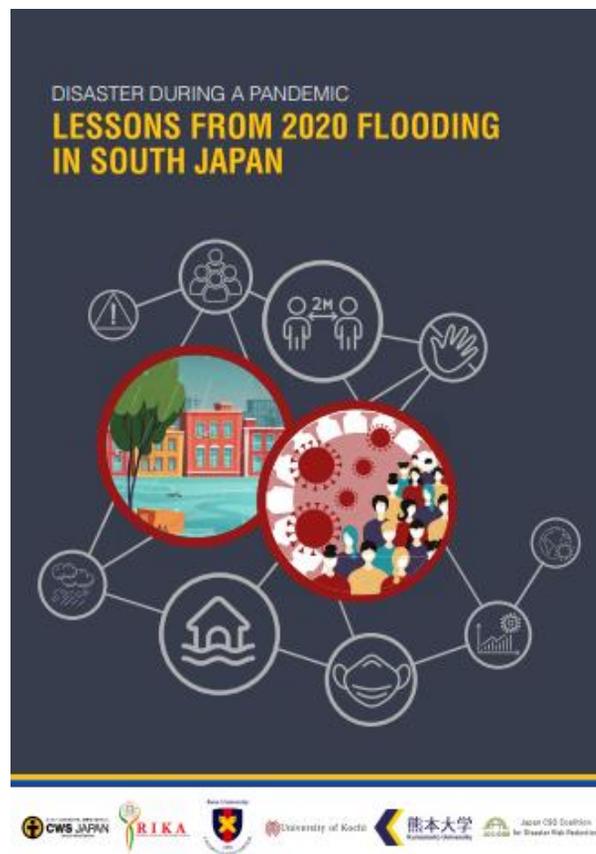
近年、世界はますます複雑化するリスク状況に直面しており、単一の事象だけでなく、包括的な対応が求められています。九州地方を襲った2020年7月豪雨は、新型コロナウイルスの猛威が広がる中で発生し、たくさんの方々が被災されました。

その教訓から学び、世界に発信する事によって更なるレジリエンスを目指す意味を含め、感染症と洪水という複合的災害の教訓を「[Disaster during a pandemic: Lessons from 2020 flooding in South Japan](#)」と称し、英語にてまとめさせていただきました。

調査・執筆・デザインに貢献頂いた全ての関係者に心より感謝申し上げます。

全文英語となっておりますが、多くの方に読んで頂けると幸いです。

(文：事務局長 小美野 剛)



(当レポートの表紙)



CWSJapan



@Japan_CWS



cws_japan

日々の活動や事業の詳細や支援先の様子などを写真(ときどき動画)でお伝えしています！